

町小だより

令和8年
2月25日
No. 705
御免町小学校

ことばのちから

校長 土田 利康

年度末を迎え、学校では、卒業式の準備や6年生へ感謝する会の開催など、学校のリーダーとして頑張ってきた6年生との限られた時間を大切にしています。そして、在校生は、良い伝統を引き継ぐ思いを日に日に高めています。子どもがグッと成長する姿を間近で見られる、教師冥利に尽きる毎日です。

先日、6年生の卒業文集の原稿に目をとおしました。77人の6年生一人一人の成長が記されていて、興味深く、また感心しながら読みました。変化した自分を振り返ったり、友達との楽しかった思い出を振り返ったりと、充実した時間を過ごしてきたことが伝わってきました。

その中で、教師の言葉に励まされたという経験がいくつか紹介されていました。「委員長をやってみなよ」「まとめるのが上手だね」「その考えいいですね」など、そっと子どもの背中を押す言葉です。嬉しさとともに、一層子どもへの言葉掛けを大切にしようと思いました。

日本人は、「言霊（ことだま）」という言葉にも表されるように、言葉には魂が宿っていると考えてきた民族です。今から1,300年も前の万葉集の歌に、「言霊」という言葉が使われています。古代日本人は、言葉に精霊が宿ると考え、その精霊がもつ力によって人の幸不幸をも左右すると考えていました。一見すると非科学的に思える考え方ですが、近年、科学的な根拠が数々示されています。

有名なものとしては「ピグマリオン効果」が挙げられます。何人かを無作為に「この子は成績が伸びる子どもである」と担任教師に不確かな情報を与えたところ、選ばれた子どもの成績は、ほかの子どもに比べ圧倒的に上がったという実験から、人は期待されると成果を出す傾向があるというものです。

私たち教師が、「すごいね」「頑張ったね」「期待してるよ」などの肯定的な言語環境を整えることが、子どもの成長を促すのであれば、行わない選択肢はありません。また、家庭や地域での言語環境も整えば、一層の成長が期待できます。共に取り組んでいきたいものですね。

時代が進み、AIが更に発達しようとも、私たち教師は言葉をとおして子どもを教え、育てることには変わりありません。子どもに影響を与える言霊を発する仕事を行っていることに、責任と誇りを新たにしたいと思います。

